



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

碩士學位論文

心にゆとりの空間を

—できるだけ軽くちょっとゆるい暮らしのために—

(『마음을 비워둘게요

- 되도록 가볍게 조금 더 느슨한 삶을 위해 -』翻譯論文)

濟州大學校 通譯翻譯大學院

韓日科

福 富 理 恵

2022年 12月

心にゆとりの空間を

—できるだけ軽くちょっとゆるい暮らしのために—

(『마음을 비워둘게요

- 되도록 가볍게 조금 더 느슨한 삶을 위해 -』翻譯論文)

指導教授 坂野 慎治

福富 理恵

이 論文을 通譯翻譯學 碩士學位 論文으로 提出함

2022年 12月

福富理恵의 通譯翻譯學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長 ----- ㊟

委 員 ----- ㊟

委 員 ----- ㊟

濟州大學校 通譯翻譯大學院

2022年 12月

역자서문

살다 보면 누군가의 말이 굉장히 마음에 와닿을 때가 있다.

‘그저 일상적인 대화를 하다 툭 던진 말인데 어떻게 된 일인지 한 줄기 빛을 만난 것처럼 흐릿하던 시야가 밝아진다.’

다니던 회사를 그만두게 되고 앞으로 어떤 길로 나아가야 할지 고민했던 저에게 한 줄기의 빛을 선사해준 사람이 바로 『마음을 비워둘게요』 저자 이애경 작가였다.

자신의 능력을 키우고 살릴 수 있는 일을 하고자 통·번역사의 길을 도전하겠다는 꿈을 품었지만, 주변에서 계속해서 들려오는 부정적인 말들에 나의 꿈은 상처받고 시들어버리려 하고 있었다. 그때 한 치의 망설임도 없이 힘껏 나의 등을 밀어줬던 그녀의 말이 없었더라면 지금의 나는 없을 것이다. 늘 흔들림 없는 응원을 아낌없이 보내주는 그녀에게 이 자리를 빌려 끝없는 감사를 전한다.

사실 이 이야기는 책 제1장 두 번째 에피소드 ‘어떤 일을 하면 미래가 보이는 건데?’에 등장한다. 혹시 그때 나와 저자의 심정이 궁금한 독자가 있다면 해당 에피소드를 유심히 읽어보길 바란다. 이 외에도 이 책에는 삶의 어떤 순간에 우리의 마음을 사로잡는 이웃의 말들이 다수 소개된다. 저자의 글을 빌려 쓰자면, 이웃의 말들이 나의 번역 작업을 통해 더 많은 독자의 마음에 닿길 기대해 본다.

끝으로 내 삶의 분기점이라고도 말할 수 있는 특별한 순간이 실린 이 책을 번역하면서 아주 뜻깊고 보람찬 시간을 선물 받았다. 언제나 열정적인 지도와 진심이 담긴 조언을 해주신 교수님들, 함께 공부하는 기쁨을 나누어준 동기들에게 진심 어린 감사를 전한다. 그리고 늘 곁에서 변함없이 나를 응원해준 가족에게 이 번역 논문을 바친다.

국문초록

본고는 이해경 작가의 저서 『마음을 비워둘게요 - 되도록 가볍게 조금 더 느슨한 삶을 위해-』를 번역한 논문이다.

책 내용 중 ‘프롤로그’, ‘1. 오늘도 나를 알아가는 중입니다’, ‘2. 한 걸음 한 걸음 너그러움을 향해’, 그리고 ‘3. 나다움을 유지하면서’의 중간까지 번역하였다.

‘프롤로그’는 이웃집 정원에 예쁘게 피어난 아마릴리스 이야기로 시작되며 평범한 일상에서 만나는 이웃의 말과 행동의 소중함을 일깨워준다.

‘1. 오늘도 나를 알아가는 중입니다’에는 가드닝 선생님, 재봉틀 교실 선생님, 선배 작가 등이 등장하며 그들의 말로 새로운 깨달음을 얻게 된 에피소드들이 담겨 있다.

‘2. 한 걸음 한 걸음 너그러움을 향해’에서는 조금 더 너그러운 마음을 가질 수 있도록 계기가 되어준 동네 카페 주인의 말, 이스라엘 여행 가이드의 말, 꽃자왈 해설가의 말 등이 소개된다.

‘3. 나다움을 유지하면서’에서는 고양이에게서 삶을 배우기도 하고 인생 후반전의 좌우명을 얻기도 하면서 나답게 사는 법을 알아가는 이야기들이 나온다.

目次

역자서문

국문초록

프로로그 5

1. 今日も私を発見中です

きれいだと思ったら花です 7

どんな仕事なら先があるの? 8

目は手よりめんどくさがりだ 10

安い物ばかり求めていると安っぽい人生になる 11

必要なものは必要な瞬間に必ず与えられる 13

切るべき枝は小枝のうちに切りましょう 14

あなたの言葉が誰かに届く時 16

一生懸命を発揮しないようにしよう 17

つまずく自由を奪わないでください 19

凶々しさと生き残ることの間で 21

いつも変わったことだらけだと言う人 22

私はイ・エギョンよ 23

2. 一步一步、広い心をめざして

本にも運命ってあると思うんです 24

1杯頼んで分けて飲むことだってあるでしょう? 25

アラが今夜さえ乗り切ってくればいいんだけど 27

1人でできる最良の趣味 28

わたしは きょうりゅうが だいすき 29

次の世代に残しているんです	30
早く有名になりたいくはないんです	31
もう知らない人の話に耳を傾ける年じゃないんです	33
木がトゲを持つのは弱いからです	34
今日 1 日だけでもわがままに過ごしてみても	36
子どもはご飯を食べるだけで褒められる	37
「あららら」と言っているうちにそうなったんです	39
3. 私らしさを忘れずに	
下手な絵って無いんですよ。まだ描き足りない絵があるだけで	40
あなたのいる場所で花を咲かせなさい	41
猫に学ぶ	42
ぞんざいに扱える人と出会うべき理由	44
自分のために「自ら望んで」	45
平凡でも平凡でなくても	46
私は一喜だけします	46
日本語抄録	48

プロローグ

少し前に、家の前にあるミカン畑の向こうに新しい家族が引っ越してきた。うちのキッチンの広くて大きい窓から、ミカン畑とその家が見える。彼らは数日間、家の外を忙しそうに動き回っていた。ある朝、キッチンの窓から外を見て驚いた。向かいの家の石垣の下に土を耕した庭ができていて、赤いアマリリスが植えられていた。すごくきれいだった。汗水垂らして植えたわけでもないのに、まるで自分の庭のようにその美しさを観賞できるようになった。

「分かち合って生きよ。与える者になれ」という言葉より、意図せず美しい庭をプレゼントしてくれた隣人の行動が私を動かした。私は苗床で育てていたヒマワリを家の石垣に沿って植えた。通りを歩く人たちとヒマワリのある風景を共有したくなったのだ。私を変化させたのは、誰かの押し付けでも小言でもなく、日常で出会った喜びだった。

隣人の言葉や行動が、平凡な日常のある瞬間にスッと入り込んでくることがある。庭の掃き掃除に出てきたお隣のおじさん、コーヒーをテイクアウトしようと立ち寄ったカフェのオーナー、不愛想な顔をしたタクシーの運転手さん。彼らは何か難しい話をしたわけでも偉人が残した名言を引用したわけでもないのに、何気ない日常の会話の中でふと投げかけられた言葉によって一筋の光が差し込んだように曇っていた視野が明るくなる。

時にこういった言葉や行動が、私の心を強く捉える。無防備だった心に雷にでも打たれたように鮮明に刻まれ、自分を振り返るきっかけとなる。鏡を見るように自分の素顔が赤裸々に映し出されることもあれば、知られたくない習慣が露見するように本心が引き出されたりもする。

こうして自分と向き合う瞬間には、好奇心とともに怖さも感じる。現れた自分の姿に失望するかもしれないから。

それでも、こういう言葉や行動が大事なのは自分を少しずつ変化させてくれるからだ。誰も簡単にには変えられない「自分」という人間を。

韓国・^{チェジュとう}濟州島での暮らしの良いところは、生き方がシンプルになることだ。半分は自分の意志で半分は成り行きで、煩雑だったものを手放すと、単純でシンプルなものだけが残った。自分という存在を証明するために握りしめていた多くのものから解放されると、人生は身軽になった。ある程度には維持する必要のあった人間関係も整理され、生きる上で余計なものがなくなると、心にも思考にもゆとりが生まれた。例えるなら、畑を耕して心の中に生えていた雑草をごっそり引き抜いた感じだろうか。

生き方をシンプルにしてみると、本当に大事なものと気にせず放っておくべきものを見分けがつくようになる。最近は何多のことも流れに任せるようにしている。頑張ったところで特に変わらない気がするし「無理に頑張らなくてもうまくいく時はうまくいく」という経験値が蓄積されたからだと思う。もちろん、だからと言っていい加減に生きているわけではない。

大事なことは、いつも些細なことから生まれる。些細なことは複雑でなく単純だ。でも、それが人生という迷路において大きな手がかりになったりもする。ただ、あまりに単純で刹那的だから慌ただしい日常の中で見逃しがちだ。

私の心を癒してくれるもの、方向性を示して勇気を与えてくれるものは、エベレストや深淵、宇宙の果てにあるわけではない。私のすぐそばに、日常の中に存在する。普通の人たちの普通の言葉の中に、すべての答えがあった。彼らの言葉に耳を傾けられるほど、昨日よりシンプルな私の暮らしに感謝したい。

私の隣人たちの言葉があなたの心にも届くことを願って

イ・エギョン

1. 今日も私を発見中です

きれいだと思ったら花です

田舎暮らしの計画の中で、一番やりたかったのが家庭菜園だ。海辺の小さな町に住んでいた時は3坪ほどの畑を耕して家庭菜園を作ったし、ミカン作りの盛んな漢拏山ハンラサンの中腹の町に引っ越してからは20坪程度の畑で野菜を育てている。自分の手で育てたオーガニック野菜や果物を食べるのはとても楽しいけれど、小さな畑でも管理するのはかなり大変だ。特に雑草を抜く作業は、もはや重労働だ。

そこらじゅうから飛んできた雑草の種は、冬眠を終えて春になると青々と芽吹き始める。雑草はぐんぐん育ち、春の終わりに差し掛かった頃には熱帯雨林のように鬱蒼と生い茂り、その勢力を拡大する。こうなるともう「雑草のように生きる」なんていう言葉で人生を揶揄することはない。雑草の長く老獪な生命力を身をもって感じるからだ。

春になって雑草がある程度育ち、手で掴んで根から引き抜けるようになったら、2～3日かけて集中的に草むしりをする。草むしりは済州の方言で「コムジルル メンダ」という。「雑草は引き抜いて後ろを振り返る間にまた生えている」という言葉が冗談に聞こえないほど、ものすごい速さで育つ。夏には最低でも週に1度は草むしりをしなければならない。この作業をさぼれば畑はそれこそ草ぼうぼうになり、手がつけられなくなる。

去年は畑を減らして庭を広げようと、畑の端に花を植えた。一面花を植えれば雑草の育つ隙間がなくなると聞いたので、実際にやってみたのだ。ところが、悩みの種ができた。花を咲かせた雑草はどうするべきか。これは花か？ それとも雑草？ 紫色の小さな花を咲かせたホトケノザ、丸くて可愛らしい花をつけたタデ、そして小さな花の咲いた名前も知らない草。これらの生命体をどうすべきか頭を悩ませ、涯月エウォルで農場を営んでいるガーデニングの先生に聞いてみた。

「難しく考えることはないですよ。きれいだと思えば花、そうでなければ雑草です」

以前、雑草を花壇に植える人もいるという話を聞いたのを思い出した。誰かの基準や世間の基準ではなく、自分の基準で生きること。草むしりから人生を学んだ。他人の基準に合わせて暮らすことに慣れてしまった私の心を見つめ直そう。私がきれいだと思ったら花。人生の選択がずっと楽になった。

どんな仕事なら先があるの？

30歳になった頃だったか、外資系企業に勤めていた友人から通訳になりたいという相談を受けた。夢と現実の狭間で悩む友人の話聞いて、私は嬉しかった。彼女の夢を心から応援したいと思ったからだ。しばらくして友人は会社を辞め、必死の勉強の末に夢を叶えた。今では海外で通訳として活躍しながら素敵な人生を送っている。

また、公企業に勤めていたある後輩は、テレビ局に転職したいと言った。私はその時も後輩の夢を心から応援した。

「やりたいことをやった方がいい」

私は後輩に夢を叶える実力が十分あると思った。仕事を辞めて新たな道に挑戦した彼女は現在、人気テレビ番組のプロデューサーになっている。

安定して暮らせる環境を捨て、不確実な未来に向かって一步踏み出すのは簡単なことではない。周囲の人たちが反対し、人生の先輩たちが思いとどませようとする。誤った選択で辛い思いをした過去の自分が足を引っ張り、先行きに不安を抱える未来の自分が邪魔をする。こんなふうにして夢はいつも心や頭の片隅にカビが生えるまで放置され、結局は朽ち果ててしまう。

記者だった私は、生まれつき批判的な面はあるけれど「可能性」については寛大な方

だと思う。もちろん「何かを切に願えばその夢が叶うように全宇宙が助けてくれる」という言葉を盲目的に信じているわけではない。けれど、今まで仕事やプライベートで色々な人の人生に触れる中で、諦めずに夢を追う人の多くはその夢を叶えるものだと知った。様々な「価値」で夢を判断しなければ、ほぼすべての夢は叶うと言っていいと思う。

先日、親しい友人に会った。済州に住む日本人で、勤めていた会社を辞めてしばらく休んでいるところだった。彼女は他の仕事を探すべきか、何から始めればいいのか、悩んでいると言った。そして少し迷ってから、通訳と翻訳の勉強をしてみるのはどうだろうかと私に聞いた。

実は、私は以前から彼女が翻訳をしてみようかと思っていた。けれど私の一方的な考えなので自分勝手に話すことはできないと思っていたところに、彼女の方から通訳や翻訳がしたいと言ってきたので、まるで自分のことのように喜んだ。

私の激励に満面の笑みを見せるだろうと思った彼女の目に、涙が浮かんだ。自分の気持ちを後押ししてくれてありがとう、周りに賛成してくれる人は誰もいなかったと言った。それで意気消沈していたのだと。おそらく彼女を大切に思っていたの言動だったのだろうが、深く考えずに投げかけたいくつもの言葉が彼女の夢を粉々に打ち砕いた。ソウルならまだしも済州で通訳や翻訳を勉強して何になるのか、通訳なんて仕事には先がない……。

「どんな仕事なら先があるの？ 未来のことは誰にも分からないでしょう？ 見えるのは過去だけだもの」

私はそう言った。どんな仕事か先のある仕事で、先のある職場なのか。私たちは誰もその答えを知らずに生きているはずだ。自分の未来も分からないのに他人の抱いた夢に対して先がないなどと言う助言は、私にはひどく無責任で残酷に感じられた。

本気で何かを望むなら、とにかくやってみた方がやらずに後悔するよりずっといい。夢でも、将来のことでも。それがどんなことであっても、相手が抱いた気持ちの種を大切に扱う思いやりこそ良き助言なのではないだろうか。

濟州にはカーナビに出てこない道が多い。農道でも車が通れたり、広い畑の間に作られた道もある。

夫はアスファルトで舗装された道路を走っている途中、時折ハンドルを切って砂利道に入ったり農道のような道を走ったりする。少し行くと道がなくなりそうになり、不安になった私が尋ねる。道を間違ったのではないかと。その度に夫はこう答える。

「間違った道なんてないよ。少し遠回りするかどうかの違いだよ」
その答えの先にはいつも新しい道が続いている。時には間違ったと思ったその場所で、新たな道に出会う。

間違った道はない

目は手よりめんどくさがりだ

ミシンの使い方を習った。洗面所で使う手ぬぐいを作るためだ。ティッシュの使用を減らそうという高貴な志から始めたことだった。

赤ちゃんの布おむつ用のさらしを何等分かして、ハンカチか布巾ぐらいの大きさに切ってからミシンをかけた。過炭酸ソーダでさらしの糊を落とすと吸収性のいい真っ白い手ぬぐいになった。数十枚作って使い回しているが、とても使い勝手が良くて満足している。

次に取り掛かったのはマスク作り。マスク不足が起こった頃、フィルターを入れ替えられるマスクを作った。ところが、布を切って適当にミシンがけをした手ぬぐいとは違い、作業はなかなか大変だった。布を買ってきて型紙を取ってから裁断し、ミシンがけをした上からアイロンがけ……。作業の工程が手ぬぐいよりずいぶん複雑で、やることも多かった。

家族用にマスク30枚分を裁断したら、布が山のように積みあがった。ミシンがけを始めて30分経つのに、縫い合わせなければならぬ生地量はちっとも減らない。ああ……いつになったら終わるんだろう。今日中に終わるだろうか。首が凝ってきた。

「目は手よりめんどくさがりなんですよ」

ミシン教室の先生が、ため息をつく私に言った。目で見ると道のりは遠く完成が遙か彼方に思えるけれど、その瞬間にも手は黙々と働いている。そして、思ったより早く作業は終わっているものだと。思い返してみれば、一体いつ終わるのかと思った草むしりも地道に続けていたら畑はすっかりきれいになったし、どこまで続くのだろうと思った漢拏山の登山道も一步一步足を前に進めるうちに気がつけば目的地に到着していた。マスクもちろん、その日のうちにすべて完成した。

目は思ったよりも、めんどくさがりで小心者なのだ。もしも目が手についていたら、世の中上手いかないことだらけだったかもしれない。文句を言ったり二の足を踏んだりせず、黙々と作業を進めてくれる手の存在が実にありがたい。これから出会うであろう幾多のこともこんなふうのコツコツとこなしてくれるようお願いしながら、一方の手でもう一方の手を優しく包んだ。

安い物ばかり求めていると安っぽい人生になる

本屋を経営していると色々な人に出会う。記者をしていた頃も多様な分野の人を取材していたから守備範囲はかなり広い方だと思っていたけれど、田舎の本屋にいとその多様性がさらに広がる。記者をしていた頃はほとんどの人が好意的な態度で接してくれたけれど、本屋の店主となった今は、訪れた人の素の姿に触れるようになったからだ。

ある日、1人の客が本屋に入って来たとき、バラエティー番組『ヒョリの民泊』のロケ地はどこかと尋ねてきた。私が知らないことを伝えると、その客は私が知っているのに答えないと答えた。ふむ……誰でも自分の好きに考える権利があるのだから、と思って聞き流した。

その客は自分は有名な教授で、名前を検索すれば出てくると言った。あれこれ値段を尋ねた後、中古で販売している英語の原書の中から1冊を選んで値段を尋ねた。私がそれに答えると、こう言った。

「この本、オンラインショップで数百ウォンで買えるのに高いんですね」

私はコーラの値段がコンビニとスーパーでなぜ違うのか、小売と卸売、オンラインとオフラインの違いをいちいち説明したくはなかった。

客はひとしきり店内を眺めてから、本の値段を負けてくれないのならポストカードでもサービスしてくれと言った。私は最大限の誠意をもって4,900ウォンのポストカードと一緒に包んだ。後で清算してみると、900ウォンの赤字だった。

「売らなければ良かったかな……。あの英語の本、私にとっては意味のある本だったのに」

夕食をとりながら、その日の本屋での出来事について夫に話した。

「安い物ばかり求めてると安いっぽい人生になるもんさ。田舎の本屋で言うことじゃないね」

そう、一般的には儉約は賢い生き方だとしても、小さな店では快く代金を支払うのが良しとされることも多いのだから。心の芯まで慰められた。

今まで生きてきた中で、私もあの客のような振る舞いをしたことがあっただろうか。100ウォン、200ウォン安く買おうと相手の心を傷つけたことは無かっただろうか。十分余裕があるにもかかわらず、人生を自ら安っぽくしたことは無かっただろうか。自分自身を振り返った。

いつもどんな場所でも親切で心豊かな客でありたい。それがその日、相手にとっての小さな幸せ、ひょっとすると大きな喜びになるかもしれないのだから。

表紙やキャッチコピーに惹かれて手にした本も、初めは面白かったのにそのうち飽きてしまったり、読みたくなることもある。また、新しく始まったドラマが楽しみで気合を入れて見ていたの

に、次第に展開が遅くなったり退屈になって見なくなることもある。美術展に行っても、何をしても、初めは良さそうに思えたのに、時間が経って中身をじっくり見てみると思ったほどじゃなかったということがけっこうある。

もしかしたら、あの人の素顔もそうだったかもしれない。実際に触れてみたら期待外れの見かけ倒し。だから縁がなかったのだと思えば気持ちの整理がずっと楽になる。悔しくもないし、未練も残らない。

#もしかしたらあの人の素顔も期待外れだったかもしれない

必要なものは必要な瞬間に必ず与えられる

韓国の女性コーラス・グループ「^{バーベレッツ}The Barberettes」とアメリカツアーをしていた時のことだ。ロサンゼルスからニューヨークに向かうために飛行機に乗った。機内に座って窓の外を眺めていると、私のスーツケースを積んだカートが私の乗った飛行機に近づいたと思ったら、途中で向きを変えて他の場所へ向かっていくのを目撃した。スーツケースには独特な目印をつけてあったので、私の荷物であることは確かだった。私はすぐにスチュワーデスと呼び、自分のスーツケースが飛行機に積まれなかったと伝えたが、スチュワーデスは確かに私のスーツケースなのかという質問を繰り返すばかりだった。100%確実だという私の主張は黙殺され、無情にも飛行機は私だけを乗せて離陸した。結局、私のスーツケースは見つからないままニューヨークに到着した。

ホテルに到着してみんなが荷解きに忙しい中、私だけ解くべき荷物が無かった。旅行の醍醐味は荷造りと荷解きだというのに。失くしたスーツケースを思って落ち込んだ。さらに、問題はスーツケースが無いと何もできないということだった。着替えはもちろん仕事もできず、そのままの格好で手元にあるものだけで1日やり過ぎなければならぬ。持っていた小さいカバンに入っていた唯一の旅行用品は、歯ブラシだった。

私は歯ブラシを除くすべての物を同行したメンバーに借りるかもらうかした。次の日に荷物が

届くと言われたため、むやみに物を買うことはしなかった。一度着ると返せない下着類は譲り受け、ルームウェアからクレンジング用品、化粧品まですべてのものを借りた。

韓国にいる友人にこの状況を伝えると、この機会に何も持たない暮らしを体験してみることを勧められた。何も持たない暮らし。たった1日我慢すればいいのだから、何も持って来なかったと思ってとにかく過ごしてみることにした。面白いことに、望んでこうなったわけではないにせよ、実際に過ごしてみると過ごせるものだ。みんなが与えてくれるものを受け取り、些細で単純なことに満足しながら暮らす。なかなか興味深く新鮮な経験だった。

ニューヨークでのスケジュールを終え、カナダのトロントに移動した。もちろん、取り戻した私のスーツケースと共に。宿泊先はコンサートを企画したプランナーの御殿のような家だった。各自の部屋に案内されてから荷解きをすると、今度は歯ブラシが無かった。ニューヨークで唯一私のそばにいた友人がいなくなったのである。

歯ブラシを買うためにスーパーへ行こうとすると、家の主人が言った。この家に一番多くあるものが歯ブラシだから好きなものを選んで使ってかまわないと。私は結局、歯ブラシまで譲り受け、正真正銘の何も持たない旅を完成させた。

何かを手に入れようと躍起になっていた頃が、今では遠い昔のように感じる。田舎暮らしをする中で、よりそう感じるようになった。無ければ無いなりに、あればあるように暮らしていく生き方に少しずつ慣れてきた。無いものがあってもいいのは、必要なものは誰かが補ってくれるからだ。時には完璧でない方が誰かの手が差し伸べられる。私に足りない部分があるからこそ他の人がそれを補ってくれる。本当に必要なものはいつか必要な瞬間に必ず与えられるという真理。これさえ胸に刻んでおけば人生はそんなに辛くない。

切るべき枝は小枝のうちに切りましょう

庭のある一戸建てに住んでいると、木を頻繁に、注意深く眺めるようになる。木が季節ごとにどんな変化を見せるのか。枝にはどうやって新芽が出て、栄養をたっぷりと吸い上げ、葉を広げるのか。そして、どのように実をつけて冬に備えるのか。

庭には私が植えた樹齢2～3年ほどの木の他に、樹齢数十年のイチジクの木と柿の木もある。草木の手入れに関して専門的に学んだことのない私は、様子を見ながら少しずつ、時には自分の勘を頼りに手入れをしている。隣の家のおばあさんにやり方を教えてもらったり、その都度状況に合わせて対処することも多い。特に枝を切る剪定や整枝の時期になると、どの枝を切るべきかいつも悩んでいた。どの枝も大事で切りがたいのだ。初めのうちは木に「ごめんね」と謝りながら小さな枝から切り落とす。そして何度かハサミで枝を切っているうちに、少しずつ大胆に太い枝も切るようになる。そのうち小枝を10本切るなら大きい枝を1本切り落とす方がずっと楽だということに気がつく。

先日、都市農業者セミナーを受けた時に専門家の方にずっと悩みの種だった剪定について尋ねてみたところ、こんな答えが返って来た。

「切るべき枝は迷わず切りましょう。枝が太くなれば切るのがもっと大変になります。小枝のうちに切ってしまう方がずっと楽ですよ。結局は切ることになるんですから」

どの枝も一生懸命伸びているように見えるけれど、実は切るべき枝は決まっている。地面に向かって垂直に伸びている枝、空の方へまっすぐ伸びている枝、他の枝が伸びるのを邪魔している枝などだ。初めから間違った方向に伸びている枝は、最後まで木の成長を妨げる。木が病気になるように、いずれ切ることになる枝だ。

剪定1年目から2年目、そして3年目と木に対する気持ちも変化した。初めは木に対して申し訳ないと思っていたが、木を大切に思うなら思い切って枝を落とすべきだということを時が経つにつれてよりはっきりと感じた。

人生も同じだ。自分に起こる出来事や人との関係においても常に剪定が必要だ。ぐずぐずしているうちに問題が大きくなってしまうと、なおさら收拾がつかないということを私たちは経験上知っている。特に自分が傷ついたり傷つけるような関係性に発展しているなら切るべきだ。風通しを良くして日差しも十分に浴びられるように適宜剪定をすることで、自分自身も健康になるし、支えてくれる人たちとの関係もより強固になる。そうやって育った木は、どの角度から見ても本当に美しい。

剪定は冬にするものだ。木全体に樹液が行き渡る前に、栄養分がまだ根にあるうちにした方が良いらしい。葉がすべて落ちて寒々しくなり細胞まで凍える冬に、枝も切り落とすなんて。泣き面に蜂、弱り目に祟り目だ。

もちろん、冬に枝を切り落としたところで木の一生が終わるなら、この物語は悲劇でしかない。でも剪定するのは、より健康に育つため、秋の豊かな実りのためだ。

私の人生は寒い冬の真っ只中なのに、枝まで無慈悲に切られるのかと思うことがある。人生のどん底まで落ちたと思ったのに、まだその下に穴があったのかと、絶望感に打ちひしがれることもある。それでも、どうにか持ち堪えてみよう。耐え忍んでいれば春が訪れ、また秋が巡って来るのだから。人生がより健やかで豊かになるのだから。たとえ、今すぐにはそう思えないとしても。

#人生の剪定をすべき時

あなたの言葉が誰かに届く時

ある日、本屋に来た男性客と一緒に来た女性客にこう言った。

「本でも1冊買いなよ」

「ご飯でも食べな」「昼寝でもしたら」「家にでも帰ってれば」といった表現のように、初めはこの言葉が本もしくは作家に対する礼を欠いた言葉に思えた。「本でも」1冊買えだなんて。物書きとして自尊心を傷つけられたように感じた。私がこれまで書いた本も、今手にしているこの本も「本でも」などと呼ばれるような、そんな1冊なのか。そう思うと悲しかった。しかし、その一方でありがたさも感じた。そうだ、本1冊でも買ってくればありがたいじゃないかと。これは本屋の店主としての立場だ。

作家であり本屋の店主でもある私は、「本でも1冊買いなよ」というこの短い言葉に悲しみと喜びが交錯する。実際、以前は特に何も考えずに聞き流していたのに、本屋を経営するようになってから深い意味を持つ言葉になった。金春洙^{キム チュンス}の詩に登場する「花」のように。

本屋をしていると、客と短い話をしたり客の会話がたまに聞こえたりもする。そんな時に私たちの話す「言葉」がどれだけ重要かに改めて気づかされる。私はそのせいか、一言話すごとに言葉をひとつひとつ一時停止させて、相手が傷ついたり誤解することの無いように話すことを心がけている。気持ちが昂ったり怒ったりしていると話すスピードが速くなり、口に出してからしまったと思うことがある(気持ちが昂ることはあまりないけれど)。だからできるだけゆっくりと頭の中で言葉を選んでから話すようにしている。否定的な言葉でも肯定的な言葉でも、言葉の持つ力を信じているから。

平均的に単語を2000語知っていれば、日常生活の意思疎通には十分だという。せっかくなから私の口から発せられる2,000個の言葉が肯定的であってほしい。できれば励ます言葉、労わる言葉、相手が楽しくなる言葉を使いたい。私の言葉で誰かの心が傷つかないように、傷つけた心が返ってきて私自身も傷つくことのないように。

#肯定の言葉だけで暮らす世界

一生懸命を発揮しないようにしよう

私は人より少しばかり一生懸命に生きていると思う。たぶん「一生懸命」というDNAが骨の髄まで染み込んでいるんだろう。特に、おでこの一部と右脚のふくらはぎのあたりに集まっているような気もする。いつも考えが先走ったり、体が先に動いたりするところを見ると。

私は朝型人間でもある。子どもの頃から朝早く起きて1日を目一杯使って過ごしていた。旅行の時もこれ以上動けない限界まで歩き回ってから宿に戻り、それでも飽き足らずパンパンに浮腫んだ脚を枕に乗せて翌日のスケジュールをチェックする。

それに、1つやってみろと言われれば2つ3つやってみないと気が済まないタイプだ。これまでの学びや経験を頼りに生きていってもいいのだろうけど、まだ学びたいという欲求が収まらず、マーケティングやブランディングのオンライン講義を受けて仕事に生かしたりしている。知らないことをそのままにしておかず、とにかく勉強したりやってみないと気が済まない質なのだ。

そんなわけで、一生懸命生きていない人が理解できなかった。もちろん一生懸命生きていないと感じるのは、あくまでも私の基準だ。でも、いくら基準を低くしてみても一生懸命さが感じられない人がいる。

「どうしてこれだけの時間にこれしかできないの？」

「どうしてあんなに何もかもがいい加減なんだろう？」

「もっと一生懸命やればできるでしょうに……」

他の人と一緒に仕事をしていて、もしくは横で見ている、こんな疑問をよく持ったものだ。私が1日で「片づける」仕事を、あの人がやるとなぜ2日、1週間とかかるのだろう。苛立つ私に夫が言った。

「一生懸命も能力だし、才能なんだ。一生懸命しないじゃなくて、できないんだよ。一生懸命っていう才能がない人もいるんだから」

「一生懸命」が才能？ 一生懸命生きるのも能力ですって？ 一生懸命がする・しないの意志の問題じゃないかもしれないなんて！ そんなふうと考えてみたことは一度も無かったけれど、その言葉が正しいと仮定して今まで理解できなかった状況について振り返ってみると、ほとんどの場合において納得がいった。

私は今まで大きな勘違いをしたまま生きていたのだ。能力が無いならせめて「一生懸命」しなさいよ、と思っていたのに。「一生懸命」自体を持ち合わせていない場合もあるなんて思いもよらなかった。人と向き合う際の基準そのものを変えるのだから、固定観念から抜け出すのに

いくらか時間がかかった。能力の無い人に「一生懸命」も無い確率が高いかもしれないというところまで気がつくと、多くの状況が理解できた。

私が当たり前だと思っていたこと、ゆえに認識すらしていなかったことに気づく瞬間がある。そんな瞬間が増えるほど、他人への理解も少しずつ深まっていく。もう少し早く気づいていればよかったのに、という口惜しさもある。そうすれば誰かを傷つけることも少なかっただろうし、自分をあんなに苦しめることも無かつたらうに……。

でも、すべてのことにはタイミングがあるということも知っている。気づくべき時が来たからこそ今、気づいたのだろう。私にはまだまだ知らないことがたくさんあるけれど、そこにも一生懸命を發揮しないようにしよう。一生懸命という才能を少し手放し、休止符を打つ。ゆるく生きることを本気で夢見ながら。

つまずく自由を奪わないでください

親しくしている年下の友人が転職すると言う。職場だけでなく引っ越しまでするというのだから、これは一大決心だ。ところが新しい職場について話を聞くと、好ましくない点がいくつかあった。向こうが友人を利用しているのがはっきりと感じられたし、必要が無くなれば厄介払いされるだろうということも、話を聞くほどに確信した。

それでも私は彼女に自分の考えを伝えることはしなかった。それとなく灰めかしてみたけれど、すでに彼女の気持ちは固まっている様子だったし、引っ越しもとても楽しみにしていたので私は何も言えなかった。

「気の毒だけど、これは彼女が自分で気づくべきことだろう」

私の予想が外れることを願ったけれど、結局彼女は1年半経ってようやく自分の選択が間違っていたことに気づいた。

他人に自分の意見を強く言わなくなったのには訳がある。数年前、友人の結婚に反対したことがあった。他でもない彼女の人生に関わることなので、自分の意見を強く伝えずにはいられ

なかった。相手の男性のこういう点が問題になるだろうという私の助言は友人を傷つけ、私たちの関係は疎遠になってしまった。友人は結婚して今も順調に暮らしているが、私が心配した部分については問題が解決されないまま結婚生活を続けていた。それが彼女の運命なら、何も言わずに彼女の選択を尊重すべきだったのか。今でも正解はわからない。

私は生来の目標志向型である上に年の割に社会経験が豊富なため、誰かの悩みを聞くと解決策がまず頭に浮かぶ。相手の話を聞いたらずは共感や励ましの言葉を口にしよう思うのに、なかなかうまくいかない。話を聞いたとたん解決策から浮かんでくるのだから困ったものだ。誰かがつまずいたり転んだりするのが確実な道を歩いていたり、あまりに答えが簡単な問題に悩んでいるのなら、ソロモン王のように賢明な答えを示して進むべき道を早く見つけられるように助けたいと思う。

ある日メンターと話をしている時に、年下の友人の件について話した。彼女が傷つき苦しむ道に進もうとしているのが明らかだったのに彼女の選択に反対しなかったし、結局は私の予想した通りになった。周囲でやめた方がいいと思うことがあるたびにお節介をするわけにもいかず、かと言って何もしないのももどかしい……。こんな時はどうしたらいいのかと尋ねた。

するとメンターはこう答えた。

「その人たちのつまずく自由を奪わないでください」

つまずくことがわかっているから、どうにかしてその道に行かせないようにしたいと思っても、それは私の役割ではない。本人が経験できるようにつまずく自由を奪わないことが、結局は相手を尊重することになる。残念だけれど、私にできることは相手がやってもみなうちから止めることではなく、黙ってそばにいて。言葉を尽くして反対した道で相手が転んでしまったら「ほら、だから言ったじゃない！」と責めるのではなく、何も言わずそばにいて立ち上げられるように手を貸すこと。それが私のすべきことだ。

私が何を会得すべきかははっきりとわかった。誰が何と言おうと、私も自分の道は自分で選択して生きてきたし、その道でつまずいたり壁にぶつかったりもした。誰かに「それは違う」と強く言われたとしても、私は自分の選んだ道を歩き続けたらうし、おそらく互いの関係が悪くなるだけだったと思う。

後から来る人たちに転ばない方法や近道を先回りして教えるのもいいけれど、彼らがその話
に耳を傾ける準備ができていないのなら「つまずく自由」を奪わないことが私にできる最大限の
配慮だ。いつもで差し出せる温かい手、少しの間休める憩いの椅子、風の涼しい落ち着ける
日陰を用意しておこうと思う。

図々しさと生き残ることの間で

YouTubeチャンネル『文明特急』のPD兼MCを務めるジェジェのインタビュー記事を読ん
でいた時のことだ。「図々しさが大事だと思います。図々しく生き残らなくちゃ」という文章で、
しばらく止まり深呼吸をした。恐れを知らない90年代生まれの思考や行動を理解したいと思って
手にした本だったが、読み始めたとたん止まってしまった。

この2つの文章に使われている言葉をすべて消して1つの言葉だけを残すとしたら、何を残す
だろう？ ふとそんなことを思いつき、単語を1つずつ消していった。「図々しい」と「生き残る」
の2つが残った。図々しくても耐えきれずに倒れてしまったら何の意味もない。図々しくなくても
「生き残る」ことが結局は一番大事なのではないか。私には図々しさよりも生き残ることの方が
重要に思えた。

実際、このように思ったのは「耐えること」や「生き残ること」の方が私にとって馴染みがあ
るからかもしれない。今まで生きてきた人生がそうだったし、上の世代の生き方を見て悟ったこと
も同じだ。でも、90年代生まれの人たちからエネルギーを感じるのは、あるいは彼らが選択す
るであろう「図々しさ」のためではないか。そういう意味で、私は彼らの求める図々しさをうらや
ましく思った。

これまで耐えて生き残ることに重きを置いて生きてきたとしたら、これから私が挑戦すべきは
図々しさなのかもしれない。図々しく、かつ生き残る。胸の奥から熱いものが込み上げてくるの
を感じた。

いつも変わったことだらけだと言う人

「何か変わったことありました？」

「いつも変わったことだらけさ！」

私の好きな作家の先輩は、近況を尋ねる私の質問に間髪入れずこう答える。人生は常に変わったことが起きるし、それが生きる活力になるというのだ。良いことでも悪いことでも、先輩の周りで起こるすべてのことをアイデアや創作活動の触媒として見ているのではないか。あるいは退屈な日常よりも、良くも悪くも人生のスパイスとなる事件や出来事を意味する「変わったこと」を好むということなのかもしれない。そんな先輩との電話は毎回楽しい。悩みについてあれこれ言う前に「まあ、そんなこともあるよな」とか「ったく、勝手にさせとけよ」といった痛快なコメントをくれるからだ。

人生を愉しんで生きている人の言葉は違う。人生に向き合う態度が違っているからだろう。人生に向き合う態度は自尊感情から生まれる。自尊感情が高い人は状況に臆することがない。自尊感情はしっかりと確立されたもので、状況は変化するものだから。確固たる自信が人を魅力的にし、その魅力がその人をより強くする。先輩はファッションも奇抜だし、好みも独特で個性がはっきりしていて、他人に何と言われようがまったく気にしない。私は先輩のそんなところがとても好きだ。

ずいぶん前に今も精力的に活動している知り合いの歌手にインタビューした時も、この先輩に対して感じたのと同じ印象を受けた。インタビューは朝の時間帯だった。現場に到着した彼女は目が赤く、お酒の臭いがプンプンした。臭いの強さからして明け方まで飲んでいただろう。私は心配になって尋ねた。

「だいぶ飲んだんですか」

「もちろん。私がちょっとだけ飲むわけないでしょう？」

包み隠さぬ正直な答えと咲き誇る花のように笑う彼女に、湧き上がる愛おしさを感じた。年上

の彼女をとても可愛らしいと、その時、そう思った。彼女の正直さがうらやましかった。

正直さは自信から生まれ、自信は愉しさを生む。私はこんなふうにはブレない人が好きだ。否定的な状況でも肯定的な答えを見つける人。すぐに悩み事を作らない人。そんな人たちと長く付き合っていきたい。私もまた、そんな人になりたい。

私はイ・エギョンよ

自尊感情について考える時、思い浮かべる人物がいる。資産家の父親が亡くなり、突如貧乏暮らしをすることになった『小公女』の主人公セーラだ。不幸を冒険と受け止める鋼のメンタルを持つ11歳の少女は、ある日突如として屋根裏部屋住まいの使用人となるが、毅然としてこう言い放つ。

「何があってもこれだけは変わらないわ。ボロを身にまとっていたとしても、私はプリンセスだっ
てこと。まばゆいドレスを着ていたら誰が見てもプリンセスだったでしょうけど。きっと誰もそう
思わない時にもプリンセスでいることの方がずっとすごいことなのよ。マリー・アントワネット
がそうだったように」

王妃の座を追われ、牢獄に幽閉された時の方がずっと王妃らしい姿だったというマリー・アントワネット。どのような状況でも挫けないこと、自らの高貴さを損なわず自尊感情を失わないことの大切さを年を重ねるにつれて実感する。想定外の事態が起きると、私は本能的に「ふん、私はイ・エギョンよ！」と自分自身に語りかける。私はスーパーウーマンでもキャプテンマーベルでもないけれど、自分の内にある力を信じているから。私の中に確かに存在する自尊感情を呼び起こし、自分が何者であるかを自覚させる。それから改めて事態に向き合うと、ずっと扱いやすくなっている。感情は落ち着きを取り戻し、自我が理性的に自分自身を守るからだ。ひょっとするとこれがセーラの持つ自尊感情であり、高潔さを持ち続ける力だったのかもしれない。

人生の危機が訪れると、自分の本性や内に秘めた気性と対峙する瞬間が必ずやってくる。本性の力で危機を克服できることもあれば、気性が原因で危機が最悪の事態に発展することもある。

人生の危機に直面した時、問題から逃げずに正面から向き合う人がある。危機に対し勇敢に立ち向かい乗り越えれば、その結果が失敗であれ成功であれ、その人生には変化が生まれる。自らの本性に正面から向き合い、素の自分を見たからだ。しかし危機を前にすると、こそこそ隠れたり逃げ出す人もいる。このような人の人生は変わらない。自分自身を見つめることのできない臆病者のままである。

今の自分の姿が好きでないとすれば、それはもしかすると人生における様々な危機や事件が起きた時に逃げてきたせいかもしれない。変わりたいなら、成長し続けたいのなら、危機が訪れた時にその渦中に飛び込んでみよう。問題に正面からぶつかっていくのは苦しいけれど、その分大きく成長した自分に出会えるはずだから。

#自分の素顔に向き合う勇氣

2. 一步一步、広い心をめざして

本にも運命ってあると思うんです

済州で暮らしている翻訳家の先生のお宅に、詩人と小説家と私の3人が招待された。物書き4人が集まったので、当然本の話で盛り上がった。

翻訳家の先生は書齋にある大量の本について語った。もともと多読家な上に贈り物でも本をよくもらうので、整理をするたびに寄贈もたくさんしているという。本棚にはお気に入りの本がギャラリーのように優雅に並べられていた。それを見た詩人がこう言った。

「本にも運命ってあると思うんです」

詩人は少し前に古本屋に行った時のことを話し始めた。カントの『純粹理性批判』だったか。最後まで読める人はいないと言われる難解な本に、メモがされていたというのだ。始めの数ページだけだろうと思いきや、最後のページまでびっしりと書き込まれていた。メモの内容はほぼ文句や苛立ちを綴ったものだった。なぜこんなに難しいのだといった類の愚痴。その本はある人の手に渡り、始めのページから最後のページまで格闘の末に読まれた愛憎の1冊だったわけだ。

ある本は物書きの家の本棚に優雅に大切に並べられており、ある本は単にインテリアのアイテムとして、もしくは家具の高さを合わせるためだとか熱々のチゲを置くための鍋敷き代わりに使われたりもする。このように本は、熱心な読書家の机の上で本としての本分を尽くす場合もあるが、昼寝用の枕のようにまったく違った用途で使われることもある。だから本には運命がある、というのだ。

この話を聞いた私たちは全員うなずいた。翻訳家の先生まで「本に運命があるって話、私が広めたんだけど」と言い出し、みんなでひとしきり笑った。本好きなら誰もが共感する話だった。

まったく同じように作られた本でも、どんな人と出会うかによって運命が変わる。同じように作られていない人の運命がそれぞれ違うのはある意味当然のことだし、どこで誰と出会うかによって私たちの人生が変わるのは言うまでもない。

1 杯頼んで分けて飲むことだってあるでしょう？

本屋から歩いて10分ほどの場所に、日本人の奥さんと韓国人の旦那さんがオーナーをしているカフェがある。おしゃれなカフェで前から気になっていたところにタウン誌を製作するプロジェクトを進めることになり、2人と話をする機会ができた。オーストラリアで初めて出会ったこと、結

婚して済州で暮らすことになった経緯など、1つの家庭の始まりにまつわる楽しくささやかなエピソードを聞かせてもらった。

日本の田舎町で看護師をしていた奥さんが大都市が苦手だったため、済州に来ることを決めた2人は、ここでの暮らしが気に入っているという。済州で何をしようかと考えた末、カフェを開くことにしたのだが、奥さんがバリスタの勉強をしたことがある上に料理も得意だったおかげでカフェを始めることはさほど難しくなかったそうだ。

カフェに飾られた東南アジアの小物のことからインテリア工事のことまで色々な話をした後、カフェの経営について質問すると、旦那さんがこう言った。

「うちはワンドリンクオーダーしなくてもいいんですよ。1杯頼んで分けて飲むことだってあるでしょう？ 必ず1人1杯飲まなきゃいけないなんてこと、ないじゃないですか」

その言葉に小さな戦慄を覚えた。世の中はあまりにも世知辛く、心無い客の言動に傷ついた多くのカフェオーナーたちにとって「ワンドリンクオーダー」は妥当な「要求」だ。言う側も言われる側もさほど抵抗のない言葉だし「お冷はセルフサービス」と同様にすっかり当たり前になった韓国式カフェ利用マニュアルだ。しかし、そんな考えが一瞬にして覆された。ああ、そうだった。お金に余裕が無かったり、お腹がいっぱいの時は1杯だけ頼んで分けて飲むことであるのに。なぜこのような心ない言葉を当然だと思って生きていたんだろう。

自分の心の狭さを見透かされたような気がして顔が熱くなった。もっと広い心を持ちたいのに、ふとした時に他人に対して心ない態度をとってしまうことがある。頭の中でそろばんを弾くべきでない場面でも本能的に損得勘定をしている。自分にとっての「損」と「得」が自然と頭に浮かび、本能が損することを回避しようとする。そんな時は「ルール」もしくは「常識」というブラインドを下ろして自己防衛をする。こう考えると恥ずかしいけれど、傷つかないように自分自身を守ろうとする本能なのだから、このような心情も理解できる。

広い心はどうやって生まれるのだろう。オーナーは、周りの人たちが自分のことを「なぜか助けてあげたくなる人」だと言ってよく助けてくれると言っていた。助けてもらったから心が広がったのか。それとも彼の広い心が周囲の人たちにも伝わったのか。

私の心はまだちょっと縮こまっている気がするけど、この出会いのおかげで自分の心と向き合えたことに感謝した。私が今どこにいて、どの方向に進んで行くべきかわかったから。一步一步

少しずつ広い心を目指して進み、疲れたら立ち止まって、そしてまた歩き始めればいい。進むべき道を見つけた時点で、私は既に成長しているのだから。

9歳の子がおじいちゃんの家遊びに来た。仕事を終えて帰って来たおじいちゃんは、お風呂に入った。しばらくして居間にやってきたおじいちゃんは坊主頭だった。

髪の毛の無いおじいちゃんの姿を初めて見たその子は、驚きと込み上げる笑いを必死に堪えながら部屋の隅に移動した。その子はそこで声を立てずに笑った。小さな肩が小刻みに揺れたが、おじいちゃんの中には入らなかった。

思いやりとは、こういうことだと思う。9歳のその子は大人よりもずっと温かく深い心を持っている。

9歳の子が見せた大人の思いやり

アラが今夜さえ乗り切ってくれるといいんだけど

「アラが今夜さえ乗り切ってくれるといいんだけど、予断を許さない状況で気が抜けないんですよ。明日の朝まで持ち堪えてくれれば、すぐに絞めて寝かせたら夜ちょうど食べ頃になるんで」

魚の延命をこんなにも切に願うその心とは！ 情熱と言うべきか、切実な想いか、あるいはこだわりとでも言おうか。言い表しがたい感情の入り混じった太い声の釜山方言で若いオーナーシェフが発したその言葉が、しばらく耳から離れなかった。まっすぐな情熱が私の鼓膜を確かに通り過ぎたとでも言うべきか。

慕瑟浦モスルポ近くの高山コサンという町にタイプライターを買いに行った帰り道だった。どこかで夕食をとろうということになり、知り合いの勧めでくれた小さな店に入った。定食の値段は9,000ウォンだったけれど、出てきたおかずが尋常ではなかった。他のテーブルを横目で見ると、黒豚と野菜を甘辛く炒めたトルチギに豆もやしのスープ、魚の煮付けは基本で、他にもおかずがズラリと並んでいた。

夫と私は定食2人前に1万ウォンのカレイの刺身を追加で頼んだ。他の魚もあったけれど、近くで捕れたもので他の店ではなかなか食べられないから、ガンギエイの刺身を発酵させたホンオフエが好きならぜひ食べてみてほしいと若いシェフに勧められたのだ。

2人では食べきれないほどのご馳走が並び、小さな胃にぎゅうぎゅう詰め込みながら夕食を堪能した。シェフは母親の経営していた店を継いでこの店を始め、近くで捕れた魚だけを使って料理を出しているという。日によってメニューが違うので良い魚が手に入ると、待っていた客に店に来るようにと連絡するそうだ。

自分の使う食材へのこだわりがあるからこそ、尋常ではないと感じたのだ。シェフは少しの間外の水槽を見てきてから私たちに言った。アラが予断を許さない状況で心配だ。アラが今夜さえ乗り切ってくれば明日とてもおいしい刺身が食べられると。魚の命にこれほどまでに必死な人は初めて見た。私は声をあげて笑った。今夜さえ乗り切ってくればいいだなんて。

高山という小さな海辺の田舎町にある小さい店だったけれど、シェフの仕事に対する独自の哲学と熱い想いがしっかりと伝わって来た。『孤独のグルメ』だったらこんな店に立ち寄って食事をするのではないか。若いシェフと主人公の会話や表情を想像しながら、家までの道のを楽しんだ。

1人でできる最良の趣味

召吉ソギルの町には書道家のおじさんがいる。大韓民国美術大展の書芸部門で特選を受賞したほどの腕前の持ち主だ。書道だけでなく、ミカンの接ぎ木のプロでもある。木を育てることに

一家言あり、家でも色々な種類の木を植えていて貴重だと言われるチョウセンシラベもある。

おじいさんと話をしていた時に尋ねてみた。書道のどんなところが良いのかと。畑仕事が終わってから夜こっそり書道の練習をしていたというおじいさんが言った。

「知り合いが退職してから何をすればいいかと聞いてきてね。書道を勧めたんだよ。花札は仲間がいなきゃできないけど、書道は1人でできる良い趣味だからね」

退職すると人と会う時間が減りがちだ。意図的に控える場合もあるかもしれないけれど、どうしても人間関係は狭くなりやすい。余剰の時間を他人で埋めようとせず1人でできることをしながら過ごすというのは、実に賢明だと思った。新たな夢を抱くようだとでも言おうか。おじいさんは1人で過ごした多くの夜に思いを馳せるように、少年のような照れた笑顔を見せた。

夜空に輝く星を見るのがとても好きだから、家の周りに街灯を設置しないでほしいと言ったご近所さんがいるという話を聞いた。その人の顔は知らないけれど、きっと誰よりも純粋で澄んだ心の持ち主なのだろうと思った。どんな形であっても便利さを手放すことは容易ではないのに、暗闇に耐える理由が星の光を見るためだなんて。星明りのために多くのことを手放す人なら、私の聞きたい話をたくさん聞かせてくれそうだ。きっと他の人とは違った生き方をする人だろうから。

#暗闇に耐える理由

わたしは きょうりゅうが だいすき

知り合いの子どもが自分で描いた手作りの絵本を私にプレゼントしてくれた。小説と言うべきか、エッセーと言うべきか。主人公は恐竜が大好きな女の子。女の子は学校に行くときも寝る

ときも、いつも恐竜と一緒にだ。絵本を読み進めていた私の目がある文章で止まった。

そう、わたしは きょうりゅうが だいすき。

「そう」という確信に満ちた言葉の後に愛情が感じられるこの文章。

人生において確信を持って何かに答えたのは、いつのことだったか。子どもの頃はすべてが確かなものに見えた。決められた道を歩き、時には逸脱しても、すべてのことが確かだった。けれど自分で決めなければならないことが増え、それに伴う責任がすべて自分にかかってくるようになる。確かなものが少しずつ減っていった気がする。人間関係で失敗し、努力しても報われないことがあると知り、こうなると思ったのに結局あぁなってしまうことが度々起こるようになると、何か確かだと口に出して言うことがあまり無くなった。絶対においしいからと勧められた店ですら、そうでないことがよくあるのだから。

だからだろうか。子どもの持つ「確かさ」がうらやましいと思った。私は恐竜が好き。本当に大好きで、それは確かなこと。そんな気持ちがうらやましかった。

私の幼少期のどこかに、こんなふうで確かで迷いの無い子が隠れているはずだ。その子を見つけ出してあげたいと思った。その子はいつの頃から勇気を無くし、確かだと口にするのをためらうようになったのだろうか。

その子のそばに行き、こう言ってあげたい。確かでも確かじゃなくても、それは問題じゃないんだと。その時の気持ちは確かだったのだから、それだけで十分なんだと。変わってしまったのは私のせいではない。だから確かだと感じるものがあれば、確かだと言ってもいいんだよと。そう伝えたい。

次の世代に残しているんです

イスラエルを旅行した時のことだ。聖地巡礼で有名な国に相応しく、訪れる場所はどれも遺跡であり博物館だった。道端の一角でもどんな場所でも、目に留まった所はどれも歴史的な意味を持つ場所だった。多くの場所がどこかで聞いたことのある地名だったし、数千年の歴史を

持つその地に滞在中、ずっと不思議な気分だった。

中でも一番不思議だったのが、終わりが見えないほど広大な土地に杭を打ってロープで繋ぎ「遺跡復元中」という看板が立ててある区画だった。ガイドによると、その場所が遺跡であると発見されてから30～40年以上経っているのに、初めて発見された時からほとんど変化が無いほど遺物発掘の進捗が遅いのだという。私の目には進捗が遅いというよりは何もしていないように見えた。ガイドに尋ねた。イスラエルだけでなく世界史においてもこの国の遺跡は重要なものなのに、なぜこのように放置しているのかと。

「次の世代ができることを残しているんです。ここでは急いで復元しないんですよ」

遺跡や遺物の発掘をするのに次の世代のことを考えながら進めるなんて。すごく不思議だった。文化遺産の多い国ならではの余裕だろうか。うらやましい気もした。

自らできることでもそれをせず次世代へと譲るために先延ばしにするという概念は、今まで一度も接したことのないものだった。それも、かなりの価値があるものを発掘して脚光を浴びる50%の可能性を放棄してまで、である。世界中のスポットライトを浴びられるなら、自分にとって大きな利益となるのなら、何としても自らやり遂げて口先だけの賞賛をも手に入れたいと望むような、そんな生き方に慣れてしまったのは私たちの方かもしれない。

ガイドは続けた。今発掘せずに目の目を見なかった遺物が歴史的に非常に高い価値のあるものだったとしても、それは次の世代のものなのだ。急がないこと、無理をしないこと、やりすぎないこと、何よりも自分が生きている今の世代を超えて次の世代へと譲るべき仕事や喜びを慮ることのできる彼らが、とてもうらやましかった。私たちは、いや私は、今を消費するのに慣れてしまった人間だから。

早く有名になりたくはないんです

記者をしていた頃、期待の新人俳優をインタビューしたことがあった。デビューしてすぐに主

役に名前が挙がるほど、とても将来有望な俳優だった。「期待の新人」という言葉にプレッシャーを感じると言いながら話し始めた彼女は、感情と思考が非常にシンプルではっきりとした人だった。長年多くの人たちと出会ってきた私の印象に深く残るほどに、澄んだ思考だった。

「私、早く有名になりたくはないんです」

彼女が遠慮がちに言った。早くデビューして早くスターになりたいと望む人が大多数の芸能界で、なかなか耳にすることのない言葉だった。彼女の気持ちははっきりしていた。早く有名になり多くの人に求められて任される作品が増えれば、自分自身が苦しくなると思う。大勢の人たちの中で翻弄されて大きなプレッシャーを受けるだろうというのが、その理由だった。自分の空間に友達を招待するように1人1人に最善を尽くし、それに慣れたら数人ずつ招き入れて、その回数を増やしていきたいと言った。ゆっくりと人気が出れば自分もその速さに追いつけるからと。周りと共に歩調を合わせていきたいという彼女の願いに驚いた。

彼女は自分自身を守るために、自分に合った速さと方法で生きていく道を選択した。私の経験上、好きな仕事を長く続けたければ、ゆっくりと自分の耐えられる速さで進んでいく方が賢明だ。一気にエネルギーを注ぎ込めば大きく前に進めるかもしれないけれど、すぐに疲れて座り込んでしまう可能性が高い。少し遅くても進み続けることの方が大事だ。

無理のない速さで進んだ方が長い間いい俳優として残っていけると言った彼女の言葉に、時が経つほどに深く共感している。

私は真面目な人が好きだ。そんなわけで、かなり感情移入して観た映画が『かもめ食堂』だった。フィンランドのヘルシンキにある通りで、日本食レストランを営んでいる日本人の物語を描いた映画だ。

店をオープンしてからひと月以上、客は1人として来ないけれど、主人公サチエは毎日店を開けて待っている。真面目に働いていれば誰かに必ず伝わるという信念を持ち、待っているのだ。思いがけずヘルシンキに来ることになったミドリとマサコと一緒に働くようになり、1人きりだっ

た食堂には温もりが生まれ、客も入り始める。

真面目さには時間を要するものだ。真面目の定義は「誠を尽くし偽りのないこと」とあるけれど、ここに絶対に追加すべきなのが地道さを基礎にした「待つこと」だ。真面目な人がそう多くないのは、忍耐まで併せ持つことが容易ではないから。これが私が真面目な人を好む理由だ。

#地道さがもたらすもの

もう知らない人の話に耳を傾ける年じゃないんです

暖かい日差しが差し込む金曜の午後、遠く島の西側から客がやって来た。70代くらいの上品な芸術家で、本を読むのが好きだからとお勧めの本を尋ねられた。最近読んだ本を順に紹介してから、濟州に住んでいる色々な人たちの話をまとめたインタビュー本を勧めると、彼女はこう言った。

「インタビューですか？ もう知らない人の話に耳を傾ける年じゃないんです。自分の周りの人たちの話も全部聞くことができないんですもの」

慌ただしいソウルの生活から離れて田舎暮らしをして良かったことの1つが、人間関係がシンプルなことだ。濟州に移り住んでからソウルでの人間関係が自然と整理された。たくさんの人に囲まれて賑やかに暮らしていると楽しくて時間が経つのも忘れてしまうけれど、その関係を通して残るものはそう多くないということに気づいた。離れてみて、初めて。

70代の芸術家の言葉が心に響いたのはそのためだろう。複雑な日々から離れるほど、年を重ねるほど、1つずつ剪定されていく。私の人生に溢れていた多くのまがい物、不要な物を思い切って捨てることができる。もちろん初めは簡単ではなかったけれど、それも時間とともに慣れる。結局は暮らしがシンプルになれば自分自身をきちんと見つめられるようになり、何が大切に気づくから。

最近は新たに人に出会うような場にはあまり行かなくなった。社会人になってからは利害関係

が絡むことなく誰かと知り合うことが難しくなった。私という存在そのものを尊重して心から向き合ってくれる人は、ほぼ皆無だ。だからこそ、そのようなことに時間を使いたくはない。その時間に親しい人と一度でも多く会って語り合った方がずっと楽しい。共に歩む時間、私たちの将来について話せる可能性が高いから。

「私たち」という呼び方ができる人たちに、より多くの時間と心を割いていたい。

センリコウの鉢植えをもらった。千里先まで香りが届くという意味の名をもつ桜の木だ。3月から4月頃になると小さな白い花が集まるようにしてモコモコと咲くのだが、何とも言えない優しい香りがしていつも香りのする方を振り向いてしまう。

センリコウについて興味深い話を聞いた。センリコウの花は受粉すると、まだ受粉していない他の花のためにしばらく香りを止め、すべての花の受粉が終わると再び香り始めるというのだ。

木に咲いたすべての花が受粉できるように、それぞれ互いを思って遠慮するだなんて。小さな花房でさえ譲り合いと思いやり、そして共生の意味を本能的に知っていた。

春になったら、またセンリコウの香りを楽しみたい。香りも心も麗しいあの花を。

#センリコウに学ぶ共生の意味

木がトゲを持つのは弱いからです

済州には「コッチャワル」と呼ばれる場所がある。森を意味する「コッ」と藪を意味する「チャワル」が合わさってできた済州方言だ。岩と藪が複雑に入り混じった密林や森のことを言い、済州にはこのコッチャワルがたくさんある。澄んだ済州の空気は、ほぼここから生み出されていると言っている。

済州で暮らしていると、やはり森がより身近になる。自然の中で過ごす時間が増え、森にも

関心を持つようになった。近くには樹木園をはじめ、生態の森、休養林、コッチャワルなど色々な森がある。このような場所を訪れているうちに、それまで一度も聞いたことなかったイヌツゲ、コムラサキ、ゴンズイ、センダンといった木も今ではすっかりお馴染みになった。

いつだったかコッチャワルで生態学習に参加したことがあった。コッチャワルガイドと一緒に2時間ほどコッチャワルを歩きながら、木にまつわる色々な話を聞いた。歩いている途中、鬱蒼とした森の巨大な木々の間に小さな木が1本生えていた。私たちは足を止めて木を眺めた。その木にはトゲがびっしり生えていた。ガイドは、他の木には無いのになぜこの木にだけトゲがあると思うかと言った。

「木がトゲを持つのは弱いからです」

動物や他のものに害されたり傷つけられやすい木にはトゲがあるというのだ。よく見ると、その木は他の木に比べて格段に細かった。ちょっとした風にも大きく揺れ、リスでも登って来ようものなら折れてしまいそうなほど弱々しく見えた。動物が木に登れないように、細い幹が折れたり傷ついたりしないように、木は自らを守るためにトゲを持つことを選んだ。

このように植物は自ら耐えて生き抜くための術を体得していた。他者にとっては単なる傷でも植物にとっては死活問題だから。

人生においてトゲを持った人に出会うことがある。小さなトゲもあるし、深い傷を与えるような太くて大きなトゲを持つ人もいる。そういったトゲに刺されると、刺した人を恨んで自分の痛みや傷ばかり気にしていたけれど、ガイドの話を聞いてトゲを持つ人たちはもしかすると非常に弱い人なのかもしれないと思った。すごく折れやすいから生き残るためにトゲを持つことを選んだ人。だから、これからは誰かのトゲが刺さったら恨んだり憎んだりせずに、その人には弱い部分があるんだなと考えることにしよう。きっとそれは彼らが生きるために選択したサバイバル術なのだから。

トゲを持った人がいたら刺さらないように適度な距離をとり、もし刺されたとしても相手を責めないこと。その場から離れて自分の受けた傷を癒すのに集中すること。トゲではなくてその内側にある相手の弱さを認めれば、彼らとの関係が少し楽になるはずだから。

「謙遜」

謙遜とは、誰かに褒められた時に「そんなことないです」と縮こまって照れたように答える態度を言うのではない。自分の手柄ではなく皆のおかげ、大したことはしていないと頭を搔くことではない。

謙遜というのは、相手が理解しがたい言動をしても、何か事情があるのだろうと考えるに至ることだ。すなわち、相手に対する尊重も含まれている。何事においても相手にも何か事情があるのだろうと受け止められれば、自分の考えを一方向的に押し付けたり頑なになることはない。寛大になれる。だから、辞書では謙遜を次のように定義している。

「相手を敬って自分を押し付けない態度」

#謙遜の本当の意味

今日 1 日だけでもわがままに過ごしてみて

長女である私は早くから物心がついたと思う。幼いころから譲ったり我慢することが多かったせいか、自分よりも他人を優先することが習慣づいている。私自身はそんな生き方を不自由に思ったことはないけれど、仲の良い友人がいつもそんな私を心配してくれた。

彼女と旅行をすることになり、一緒に計画を立てていた時のことだ。彼女が突然、旅行先で 1 日だけでもいいからわがままに過ごしてほしいと言い出した。旅行の費用も全部自分持ちで私にすべて合わせるから、旅行の間はしたいことだけをして、やりたくないことは何もしないでほしい。自分に合わせたり世話を焼いたりせず、気遣いもしないように。本能の赴くままにやりたいようにしてほしい。自分がすべて受け止めるからと。

私は笑いながら、そうすると約束した。しかし、身に染みついた習慣がそう簡単に無くなるはずもない。私はすぐに他人の世話を焼いて気を遣ういつもの姿に戻ってしまった。自分が大変な思いをする方がましで、誰かが困っているのを黙って見ていることができない性分なのだ。

時折いい意味で誰かを気遣って疲れてしまうことがあると、彼女の言葉を思い出す。あの時、彼女の言った通りに1日を過ごしていたらどうなっていただろう。あの旅行をきっかけに自分を優先して行動することに慣れてそれが自然になっていたら、自分の気持ちや状態によって相手に対する「Yes」「No」のボタンを自由に選択できるようになっていたのではないか。

月日を積み重ねる中で、自分のやりたいようにやるわがままな人とまではいかずとも遠慮しすぎない生き方も学んだ。相手の気遣いの受け入れ方も、何が「私」のための選択であるかも以前よりわかるようになった。いまだに自分が大変な方が気が楽ではあるけれど。

他人を気遣いすぎず、時には自分を先に気遣うこと。自分が我慢する方ではなく、我慢しない方を選ぶこと。私のことを自分よりも先に気遣ってくれた彼女にすごく会いたい。今は遠くアメリカで暮らしていてすぐに会うことはできないけれど、私の「わがままな」選択をすべて受け止めてと言ってくれた彼女の想いに心から感謝している。

皆がする程度には誰だってできる。それ以上のことをするのが「エクストラ・マイル(extra mile)」。相手が望んだ距離より少し先まで行くこと、相手の期待よりも多く提供することを意味する言葉だ。

言うは易く行うは難し。できればエクストラ・マイルを走れる人になりたい。それでいて見返りを求めない人に。

#共に人生を走ってくれる人

子どもはご飯を食べるだけで褒められる

子どものありとあらゆる行動は、そのほとんどが褒められる対象となる。ご飯を食べただけでも褒められ、ファンサービスで椅子に座って食べようものなら拍手喝采は2倍になる。よちよち歩いても、意味不明の喃語を発しても、一歩ずつゆっくと階段をのぼっても、大きいのがスツキリ

出ればプーンと臭いがただけでも、とにかく何でも褒めてもらえる。この褒めるという行為は無条件の愛と慈しみの表れであり、子どもはこのような愛情を受けてすすくと育っていく。

ところが、いつの頃からか褒められることが減ってくる。ご飯を食べても、危なげなく歩いても、もう「上手だね」などと褒められることはない。子どもから青年へと成長して大人になる中で、子どもの頃に褒められたことはどれも当たり前になってしまう。

「子どもってさ、階段のぼったり、ご飯食べるだけでも褒められるでしょう？ 本当に幸せな時期よね」

母親の手をにぎって一生懸命階段をのぼる子どもの姿を眺めていた知人がそう言った。私にはその言葉が、何をしても無条件に褒めてもらえたあの頃を懐かしんでいるように聞こえた。大人にとって日常の行動はもはや褒めるような事柄ではなくなり、よほどのことがない限り誰かに認められたり拍手を受けたりすることは無いからだろう。

ふと祖母のことを思い出した。祖母は80歳の頃に介護施設に入居し、私たち家族はお盆や正月の頃には祖母に会いに施設を訪れた。ベッドに横になった祖母の姿は、まるで子どもだった。すぐに拗ねてやっかむ子ども。誰かの助けが無ければ起き上がることもできず、食事も取れない。子どものように何もできなくなっていた。

子どもの頃に見ていた母と祖母の姿はごく平凡な母娘という印象だったけれど、祖母がシワの数だけ年を取ってできないことが増えてくると、母はいつの頃からか祖母に対して子どもを相手するような接し方になった。特に介護施設に入ってから祖母は、すっかり母の子どもになっていた。母は祖母がきちんとご飯を食べたと褒め、少し体を動かせばよくやったと励まし、周りのおばあさんたちと仲良くしていると言っては褒めた。母は、母鳥が雛を抱き寄せるように大丈夫だと祖母を安心させ、子どもに語りかけるように優しく丁寧に1つずつ説明した。同じことを何度か聞いてようやく祖母は子どものようにうなずいた。わかったのかどうかはわからないけれど。

子どもが褒められている姿を見て祖母を思い出したのは、私も年を取っていくからだろう。同じ道を母が行き、そして私も行くのだろうから。私も母を褒め、子どものように世話をする日がいつか来るのだから。その時のために優しい言葉をたくさん集めておこう。

「あららら」と言っているうちにそうなったんです

「どのようにして作家になられたんですか？」

誰かの質問に、私は「気づいたら作家になっていたんです」と答えた。考えてみると、初めから作家になりたかったわけではなかった。思いがけず機会が訪れたに過ぎなかった。もちろん記者として働き始めてから常に書くことを生業としてきたし、物を書くことが好きだった。作詞を手掛けた時もそうだった。偶然のきっかけから歌に詞をつけることになり、作詞家と呼ばれるようになった。

^{ソギル} 召吉で本屋を始めた時もそうだ。プライベートの作業場と事務所を兼ねたスペースとして使うつもりだった場所が広くて素敵だったので、1人で使うにはもったいないと思ひ至り、本を作る空間だから本を売ってはどうかと考えた。こうして「あららら」と言っているうちに、この場所に本を置くことになり、私は本屋の店主になった。

振り返ってみると、私が何かきっちり計画を立てて実行に移そうとしたことは、いつも失敗に終わった。おそらく私が計画を立てたほぼ唯一のことは移民だったと思う。長い時間かけて計画を練り、移民の準備を着実に進めた。就労ビザも取り、必要な英語のスコアも取得した。かなりのハイスコアで永住権も問題なく取得できる条件を備えたのに、急な事情で移民計画は水の泡となった。

こうして考えると、計画を最後まで達成したことはなく、何となく始めた数多くのことが私の人生の軌跡になっている。私が必死に努力して叶えたことは1つもないような気がする。「誰かのおかげで」「何となく縁があり」「思いがけず」「やっているうちに」「運良く」といった修飾語が並ぶ。

正直なところ、以前はこれらすべてのことの中に私がいると思っていた。私の才能、私の独創性、私の度胸、私の能力が相まってすべてを叶えたのだと思っていた。けれど実際にはそうではなかった。私がしたことは何もなかった。私はただ「あららら」という感嘆詞を発していただけ。

これからも私は「あららら」とだけ言っていたい。思いがけず、誰かのおかげで、何となく、

運良く……という靴を履いて人生を歩いていく方が、自分の計画を達成するよりもずっと意義深く、貴重で、容易いということに気づいたから。

私の夢はささやかなものだ。好きな人たちと一緒に食事をした時に、迷わず食事代を支払える精神的・物理的な余裕。実際、大金持ちになりたいとは思わない。でも、それさえも望みすぎだろうかと考えることがある。この願いが「ささやか」の基準を遥かに超えているのではないか。そんなわけで普段から欲張らない練習を繰り返している。

最近是谁かに対して何かを差し出すと、他の誰かが同じ分だけ補ってくれる。余裕があるから差し出すのではなくて、差し出せばその分また補ってもらえるからプラスマイナスゼロ。分かち合い、補い合うサイクルがこんなふうに繋がるだけでも、私の夢は叶うかもしれない。余裕は無くても、不足もまた無いのだから。もしかすると、これが私の求める「ささやかさ」なのかもしれない。

#ささやかだけど大きな夢

3. 私らしさを忘れずに

下手な絵って無いんですよ。まだ描き足りない絵があるだけで

絵が大好きだけど、才能は無い。子どもの頃、美術大会で賞を取ったこともあったけれど、今思えば参加すれば誰でももらえる賞だったような気がする。だから余裕ができればきちんと絵を習ってみたい。文章は長くても短くても読む時間が必要だし、じっくり味わうにも時間を要するけれど、絵は何というか、一瞬で見る人の心を魅了する強い力を持っていると思うから。

絵に対する想いはいまだ冷めやらず、時々ワンデークラスのレッスンに参加する。最近も絵のレッスンを受けた。ソウルの洗^{セコムジョン}劍亭にアトリエを構えていた先生が、済州の南元^{ナムオン}に引っ越してきて開いた教室のプログラムだった。初めて先生に会った時、私は絵を見るのも好きだし上手く描けるようになりたいのに才能が無いようだと言った。すると先生がこう言った。

「下手な絵って無いんですよ。まだ描き足りない絵があるだけで」

短いけれど強烈な言葉だった。俳優のフィルモグラフィーを眺める観客のように、過去から現在までの人生に一通り目を通した結果、私は絵を本気で描いたことが無かった。情熱も時間も十分にかけて絵を学んではいなかった。いつも絵を描きたいと思うばかりで「私には才能が無い」と自分の限界を決めつけて、実際にやってみることはあまりなかった。結局、私にはいつも描き足りない絵だけが残り「絵の才能が無い」と思い込んでしまったのだ。

これまでの人生で似たようなことがどれだけあったらこうと考えてみる。十分にやってみないまま努力もせず「才能が無い」と自らレッテルを貼ったものがどんなに多かっただろう。「学び足りなかった」勉強、「弾き足りなかった」ピアノ、「やり足りなかった」料理など、私はどれだけの夢を先送りしてきたらこう。わざわざ1万時間の法則なんて大袈裟な言葉を使わなくても、やりたいと思ったことに本気で100時間費やしたことすらほとんど無いように思う。そんな夢がしまわれた場所は「才能無し」のフォルダではなく「やり足りないもの」のフォルダだったのだ。

そのフォルダをそっつと開けて中に何がしまわれているのか、あるいはごちゃまぜになっているかよく見てみよう。もしかしたら、私の人生の第2ステージを幸せなものにする「やり足りなかった何か」がキラキラした目で私を待っているかもしれないから。

あなたのいる場所で花を咲かせなさい

私たちはよく「状況が良くなれば」「後でこうなったらあれをやろう」などと口にする。いい家に引っ越したらインテリアにこだわろう、お金に少し余裕ができたなら人のために何かしよう、彼氏

ができれば絶対あそこに行こう、いい会社に転職できれば本気で働こう……といった具合に。

考えてみると、これらのことは一生起こらない可能性もある。私たちは「後で」という言葉をよく口にするけれど、その「後」は永遠に来ないかもしれないのだから。こういう話における「後で」は「もし」と同じような意味合いだ。「もしこんなことが起きたら」の「もし」。けれど今日起こることすら予測不可能なのだから、明日のことなんて知る由もない。「もし」を待ち呆けて一生を終えるかもしれない。「もし」の後でしようと思った数多くの計画は、どれも消えてしまう。だから今いる場所でできることに全力を尽くすこと。取り巻く環境がどうであれ、自分のすべきことをする。これが私が今、そして今日すべきことではないだろうか。

Bloom where you're planted.

あなたが植えられた場所で花を咲かせなさい。

私たちはつい隣の芝生を青いと思いがちだ。自分のいる庭はどこか物足りず、みすぼらしく見える。それでも自分がすでにどこかに植えられているのなら、やるべきことはしっかりと根を張ること。素敵な庭に植えられるのを待つのはやめよう。自分の場所で、自分が根を下ろしたこの場所で、自分が生きているこの場所で花を咲かせることこそが、私のすべきことだから。

猫に学ぶ

海辺近くの町に住んでいた頃のことだ。捨てようとしてあったゴミ袋がギザギザに破られていて、前日に食べた鶏肉の骨が庭のあちこちに散乱していた。何事かと庭をよくよく見渡すと、体の小さな猫が1匹、こちらの様子をうかがいながら隅っこに隠れていた。

その後もしょっちゅうその猫がゴミ袋を攻略してくるので、頭を悩ませた夫と私は結局、餌を買って与えることにした。幸いにも猫は餌をよく食べた。ところが、痩せていた体が丸み帯びてきた頃、突然猫がいなくなった。しばらくは餌を用意して待っていたけれど、猫には縄張りもあるし他の所に行ったのだらうと考えて気にしないことにした。

ふた月ほど経ったある日の午後だった。家のすぐ横の砂浜の方からモゾモゾと動く生き物の

軍団がこちらに向かって歩いて来るのを目撃した。あれは何だろう。見定めようと目を細めた瞬間、低い石垣を軽々と飛び越え列をなして入って来たのは、うちで餌を食べていた猫とその子どもたちだった。ここは自分の家だと言わんばかりに堂々と入ってきて餌をねだるので、私たちはそのまま猫たちの餌係となった。

子猫たちは母猫とは違ってどんどん大きくなった。庭に敷いたウッドデッキの下に潜り込んでドタバタしたり、石垣の上に登って街を見回したり。ある日はブロッコリーが植えてある小さな鉢の上で丸くなっていたこともあったし、玄関のドアの隙間から不法侵入してシューズボックスの中に無理やり入り込んでいたこともあった。

その頃からだろうか。私は猫をじっと眺めている時間を楽しむようになった。小さな箱の中に体を丸めて入っていたり、ゴロゴロと喉を鳴らしている様子、すました顔で私の脚に体をこすりつけていく姿にすごく猫らしさを感じた。

中でも、うつ伏せでじっとしていたのに急に猫パンチで空を切ったり、丸くうずくまっていたと思ったら次の瞬間ぴょんと跳び上がる姿は、何度見ても本当に不思議だ。そんな時、ジャン・グルニエの言葉を思い出す。

動物たちの世界は、沈黙と跳躍とからつくられる。

人生は沈黙と跳躍が並べられたチェスボードみたいなものだ。沈黙と跳躍は常に共にあるのに、私たちは沈黙に対して毅然とした態度でいられない。沈黙は望まれず、跳躍のみが求められる。跳躍の次の跳躍を求め、長い沈黙は失敗と見なす。ゆえに沈黙のさなかにいる者にとって、その時間は非常に辛く重苦しいものだ。

そんな時は猫になってみる。うつ伏せでうずくまっている間に、自分の背丈の何倍も高く、スプリングのようにジャンプをするエネルギーを蓄えることに集中する。他の猫が跳ぼうが舞おうがお構いなし。狙いを外してしまっても、また丸くなって次の跳躍を待つ。

周囲を気にせず堂々と生きることを猫から学ぼう。液体説がささやかれるほど柔軟な猫のしなやかさ、どこに居候しても自分が主であるかのような堂々たる自尊感情、執事をあごで使うノウハウ。どれも猫から学んでいる。

「最近はどんなことが心配？」

後輩にそう聞かれた。久しぶりに済州に遊びに来たその後輩は、世の中のありとあらゆる心配事を背負って生きている子だ。

「私？ 心配してないけど？」

迷いの無い私の答えに、後輩の口から感嘆のため息がこぼれた。先輩は誰もが憧れる済州に移り住んで何の心配もなく気ままに暮らしているんだなあ、といったうらやましさから出たものだろう。「私にだって心配事くらいあるわよ。心配して解決するなら心配するだろうけど、そうじゃないから気持ちとエネルギーの無駄遣いをしないようにしてるだけ」と加えた。

そうなのだ。心配事が無いわけではなく、心配をしないのだ。何度か買っているうちに必要ないことがわかって、それ以降買わなくなる物がある。ようやく気づいた。心配もまさにそんなものだと。

#心配が無いのではなく、しないということ

ぞんざいに扱える人と出会うべき理由

男が女を大切にすることがどれだけ重要であるかについて、友人たちと話したことがあった。知り合いの紹介で出会った彼が誕生日にケーキと花束をプレゼントしてくれて、その優しさに惹かれて結婚したという友達の友達の話。江南から京畿道^{カンナム キョンギド}まで通勤をしていた時に彼氏が毎日送ってくれて、結婚するに至ったという友達の話……。

その場で下された結論は「女はちょっとぞんざいに扱える男と一緒にいるべきだ。その方が楽に生きられる」というものだった。以前、仲のいい年下の友人も、女は男をぞんざいに扱ってもいいのだと言っていた。その時も、みんなで話した時も「人に対する礼儀を欠いたなんて乱暴な考えだろう……」と思ったけれど、結婚してこれがどういう意味かようやく理解した。

彼女たちの言った「ぞんざいに扱える」の本当の意味は、ありのままの自分を見せてもまった

く揺らぐことのない愛というのは存在し、そのような人と出会うべきだということだった。愛は感情ではなく暮らしであるということを彼女たちは既に理解していたのだ。

自分のために「自ら望んで」

作家イ・チュンゴルの著書『誰も気づかない僕たちの特別さ』にこんな言葉がある。

我々の多くが証明しなければならないことの多い人生を生きている。満足し、満足させねばならないという強迫観念のために必死に生きている。(中略)しかし、自分が幸せでないなら、他人の希望に何の意味があると言うのだろう。

相手を満足させなければならないという考えが、人との関係の基本になっている。満足させることは難しくても少なくとも文句を言われないようにしなくては、と。しかし望んでするのはなく、努力によって何かをすることで自分がストレスを受け幸せでなくなるなら、他人を満足させることに何の意味があるだろう。

誰かを満足させねばならないという強迫観念も手放そう。私は白衣の天使ナイチンゲールでもマザーテレサでもないのだから。誰かの喜びと満足は、ひとえに「私が自ら望んで」自分の幸せを前提とした「意志」によってのみ成立する。

人は簡単には変わらない。他人に変化を強要するのは愚かなことだ。変化とは、殻を破って出てくる雛鳥の誕生のようなものだ。母鳥は雛がきちんと羽化できるように温かく包み込むことはできても、最初から雛の代わりにくちばしで殻を破ってやることはできない。殻を破って出てくるのは、最初に膜を破るのは、雛自身なのだ。

#変化は私が一步踏み出した瞬間に始まる

平凡でも平凡でなくても

存在するかどうかともわからないような生き方をして消えていく人生を望む人がいるだろうか。虎は子孫を、人は名を残したがるものだ。多く的人是他の人よりも目立つ生き方を夢見て、自分の特別さを皆がうらやむことを望む。

しかし時が経つにつれ、一番難しいのは平凡に暮らすことだと気づく。最近は特にそうだ。平凡であることが、毎日の日常が、どんなに大切か気づかされた。気にも留めず当たり前だと思っていたことが、こんなにも根底から揺るがされるとは思いもよらなかった。

映画『カメは意外と早く泳ぐ』の主人公は平凡な主婦だった。退屈でつまらない毎日を過ごしていた彼女は、偶然スパイ募集の広告を目にして面接に行き、その場でスカウトされて指令を受けることになる。

彼女が任された任務は、できる限り目立たないように平凡に振る舞うこと。その時から意味無く過ぎていた平凡な日常が、スパイとしての重要任務を果たすための特別な日々となる。

この映画の「存在感の無い人になる任務」という設定がとても新鮮だった。スーパーに行ってもできる限り平凡なものを買ひ、何をするにも目立ってはいけなひ。映画を観ながら、この逆転の発想に感嘆した。私たちは注目される人生を歩み、何とかして存在感をアピールするために全力を尽くせと教わったからだ。

常に何かであろうとして命を燃やすように必死に生きていても、結局最後に残るものはあまり無かったのではないか。平凡でも平凡でなくても、自分らしさを忘れずに日々を大切に生きていくことこそが最も意味のあることかもしれない。

私は一喜だけします

「一喜一憂せずに、穏やかに大胆に生きましよう」

Aがそう言うとみんながうなずいた。

すると、Bがきっぱりと言った。

「私は『一喜』だけです」

一瞬の静寂。

私はなぜ今までこんなふうを考えられなかったのだろう。

一憂はせずに一喜だけしよう。

「一喜だけしながら生きましょう！」

人生の後半戦における座右の銘にしたい。

日本語抄録

本稿は作家イ・エギョンの著書『心にゆとりの空間を－できるだけ軽くちょっとゆるい暮らしのために－』の翻訳論文である。

本稿では、原書の「プロローグ」「1. 今日も私を発見中です」「2. 一步一步、広い心をめざして」と「3. 私らしさを忘れずに」の半分を翻訳した。

「プロローグ」は、隣家の庭に美しく咲いたアマリリスの話から始まり、平凡な日常の中で出会う身近な人の言葉や行動の大切さについて語られている。

「1. 今日も私を発見中です」には、ガーデニングの先生、ミシン教室の先生、先輩作家などが登場し、彼らの言葉によって新たな気づきを得たエピソードが綴られている。

「2. 一步一步、広い心をめざして」では、広い心を持つためのきっかけになった近所のカフェのオーナーの言葉、イスラエルの旅行ガイドの言葉、コッチャワルガイドの言葉などが紹介されている。

「3. 私らしさを忘れずに」では、猫から生きる術を学んだり、人生の後半戦における座右の銘を発見したりしながら、自分らしい生き方を見つけていくエピソードが登場する。